人日潭藪潭綿、譯官二人日李錫明廣南陳阿卯等各從ひきたる、翌十四年己酉三月十三日、崎陽を出て、四月十六日、大坂に至り、同二十六日、伏見より京花に入、同二十八日、禁掖に朝して天覽を蒙むる、爵位なくして禁闕に參入の例なければとて、獸類と位白象と稱へられたりといへり、同五月二十五日、江戸に迎へ給ひ、同二十七日、營中に於て上覽あり、其後中野に象厩を建て、是を飼せられたりしが、二十餘年を歷て、寛延の頃斃せりといふ、

當寺に存するものは、其牡象の枯骨なり、

牡象 七歳 總身灰色にして、頭の長さ二尺七寸、頭は俯さす、又顧廻する事あたはす、鼻の長さは四尺程、或は三尺三寸とも云 同圍一尺五寸、末の方にては六寸許ありといふ、鼻孔二ツ、端ふかく凹にしてよく開闔す、中に小き肉爪ありて、よく針を拾ひ芥子をつまむ、水を飲、酒を啜るにも又鼻を以てし、食する時も鼻を以て捲入る、一身の力は皆悉く鼻にあり、起て行んとするとき先鼻を以て地を柱へて後、あしを延す、口は頤にかくれて地を去事遠く、常にはみゆる事なし、牙の長一尺二寸程、或は一尺四寸、圍は元の方に計て一尺六寸計ありといへり、眼の長さ三寸、或は一寸五分、形蝙蝠の翅、又銀杏葉の形に似たりともいふ、胴の長さ七尺四寸、同圍一丈、背の高さ五尺、或は五尺七寸ともいへり、足の長さ二尺二寸、同圍一尺五寸、或は三尺五寸、圍二尺五寸ともいへり、足の形は圓柱の如にして、指なく爪は五枚ありて、栗の形に似たりといふ、總身ふくよかに、擁腫すれども、峻嶺にのぼり羊腸を下るに、電の如く、深き水を渉る事捷く、其性能人に馴て其意を解す、故に象奴たる者、其頭すぢに跨り、鐵釣を以て釣、進退曲折左右すといふ、尾の長さ三尺三寸、或は二尺七八寸とも、形牛尾に似たりとなり、

牝象 五歳 總身灰色にして、頭の長さ二尺五寸、鼻の長さ二尺八寸、胴の長さ五尺計、同圍八尺六寸、背の高さ四尺七寸、或は四尺となり、牙の長さ五寸程ありて、其餘は牡象に等しといへり、此牝象は長崎にありし頃斃しなり、江戸へ來りしは牡象のみなり、飼料、一日の間に新粟二百斤、篠の葉百五十斤、青草百斤、芭蕉二株、根を省く、大唐米八升、其内四升程は粥に焚て冷し置て是を飼、湯水二斗度程に饗あんなし、饅頭五十、橙五十、九年母三十、又折節大豆を煮冷して飼ふ事あり、青草の中、殊に俗間角力取草と稱するものを好みて食ふ、青草なき折には、粃を莖穗ともに飼、或は藁大根のたぐひも食ふとなり、又好んで酒を飲といへり、

〔武江年表十一〕文久三年癸亥四月、兩國橋西詰にて、異國渡來の牝象を見せものとす、灰毛九尺計あり、三歳と云